

審査の結果の要旨

氏名 神田 惟

本論文は、ティムール朝末期からサファヴィー朝時代にかけての工芸品における、ペルシア語詩銘文と造形表現、職人とペルシア語詩作との関連性を明らかにすることによって、イスラーム工芸史研究に新しい方向性を提供した。一般的には無名の存在である職人がどのような人物であり、いつ、どこで、誰のために、どのように工芸品を作り上げたかを知ることはほぼ不可能と言ってよい。一方で、この時代の工芸品にペルシア語詩が書き込まれていることはよく知られていたが、その内容に対する術的関心は薄かった。しかし、本論文はまず第1章で、これまで工芸史研究ではあまり参照されてこなかったインシャーや詩人伝というジャンルの文献史料／文献資料を用い、職人の詩作サークルへの参加やその詩の特徴を明らかにした。

本論文に付されたこの時代のペルシア語詩入り陶器の容器と墓石、金属製燭台および書き込まれたペルシア語詩のカatalog・レゾネは大変な労作で、本論文の学界への大きな貢献の一つである。第2章から第4章までは、こうした作品のうち、陶器、金属器、テキスタイルとそれぞれに異なるメディアにおいて、いくつかの作品について詳細な検討を施した。第2章では陶製の墓石に被葬者のために特別に作られたペルシア語詩が書き込まれていることを示し、陶工と詩人との協業体制を明らかにしたほか、ラスター彩製陶がイランの都市カーシャーンにおいてサファヴィー朝時代にも引き続き行われていたことを明らかにした。第3章ではシーア派イマーム廟に寄進されたことが明白な金属製燭台に刻まれたペルシア語詩の内容と造形表現を検討し、イマーム廟に燭台を寄進する文化の存在とそのような用途に使われる既製品が制作されていたこと、さらには寄進者およびペルシア語詩の作者の同定から燭台の制作地がカーシャーンである可能性を指摘した。第4章では祖先の廟に寄進されたペルシア語詩銘文入りの絨毯やシーア派イマーム廟に由来すると言われるテキスタイルに記されたペルシア語詩と図像を考察、比較し、それらの用途、設置場所、制作年代について説得力のある結論を導き出した。第5章では、詳述した作品が共通して都市カーシャーンと関連性を持つことから、カーシャーンにおけるペルシア語詩と職人の関係、文化的環境とシーア派的傾向を取り上げ、当該時期の特定の都市における職人の工芸品制作にまつわる多様な側面を例示した。

審査委員会では、異なった都市、地域との比較や工芸に対する当時の人々の認識についての考察など解決すべき問題点は残されていることが指摘されたが、ペルシア語詩の解釈を美術史的考察に加えることにより、工芸史研究において様式分類以外の角度からの新知見を多数提示しており、学術的貢献は非常に大きいとする点で一致をみた。したがって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位にふさわしいと結論した。